



もど子と人婦

號貳拾第卷五第

もど子

四つの願

やまとの翁

今からづーっと昔には、神様が
時々、人間の姿をして、世の中
へ出ていらしたといふことで
すが、このおはなしも、やはり
其時分のことでございます。

さても、ある年の暮の大晦日の夕方、乞食の様な姿をした二人の穢い旅人が、とぼくと勞れた足をひきずって來て、一軒の金持相な農夫家の前に止って、今夜一晩丈け、泊めてくれないかと頼みました。其家の主人は慾助といふのですが、

「いや、私の家は狭くって、とても旅の人だの乞食だのを泊ませる室などはありませんね」

と斷はりました。

旅人は夫を聞いて、夫では仕方がないといふので、重た相な足をひきずりながら、又づんく歩いて行って、今度は汚い小さな農夫小屋の前に止って、前の様に頼みました。其小屋には貧乏な夫婦の農夫が住んで居りました。

「さあ、くお這入りなされませ、ご覽の通りの家ですから、着て寝るものもございませせんが、夫でも宜しければ、這入ってゆっくりにお休み下さいませ」



といはれたもんですから、二人も喜んで、夫ではお邪魔になりませうといひながら、草鞋や脚絆など解いて、どっこいしよと上っ

て、やれくといふので、先づ一服と火の側に寄って足を伸ばして休んで居ます、と、勝手の方では、おかみさんが、亭主に低聲で言つて居ります。

「ねーあなた、明日はお正月の元日といふお芽出たい今晚のことですから、あの二人のお客様にも、何か御馳走したいものですね。そうく、いっその事一番の鶏ね、あれをしめ様ではありませぬか」

すると亭主の方では

「うん、いゝ所に気が付いたな、夫じゃあれを料理しよう」

そこで、二人は早速二羽の鶏を料理して、夕飯の御馳走にしました所が、二人の旅人は大層喜んで頂きました。其中寝る時間にな

りますと、夫婦は自分等の布團をお客様に着せて温かく寝かせて置いて、さて自分等は、別に納屋から藁を取り出して来て、庭の片隅に夫を敷いて其中にくるまって寝て仕舞ひました。

さて、其翌朝の元日になりますと、二人は厚くお禮をいって出立って行かうとしましたが、夫にしてもこんな親切に泊めて貰ったが、ご覧の通りの乞食だから、お禮をさし上げる事も出来ないで、實に御氣の毒だといふことを、くり返しくり返し言つて居ますと、夫婦は心立の善い人ですから

「決してそんな御心配はいりませぬ、お禮を頂く積りでとめた譯ではありませぬから。」

と、いって断つて居ります

さてこの二人が、今しも其小屋を出やうとした時に、一人が、ひいと振り向いて、

「時に御夫婦の方や、あの夕の鶏ね、あれには脚があつたのかな」と聞きました。亭主は、はて妙な事を聞く人だなと思ひましたが、夫とも、鶏の脚を欲しいとでも思つておいでるのかとも考へまして、

「へい、脚はございますが、然し全体鶏の脚つてもものは別に何にもなりませぬもので」

「ふーん、何本あるかの」

「そりや二本でございますよ」

随分變な事を聞く人だと心の中で不思議に思ひながら、眞面目に

答へますと、

「あゝそうか、それではお前さん、何でもよいから、二つ丈はお前さんの希望を言つてごらんなさい」

といふ、然し亭主は、希望といつて他にない、たゞ毎日のお米が頂けて、安樂に暮らして行つて、死んでから極樂に行ければ夫で宜しいのであると答へました所が、

「じゃー、其希望は屹度叶うことになる。夫では來年の今頃又やつて來ますよ」

と言ひ残して其小屋を出て行きました。

所がさて其日からといふものは、この夫婦の小屋は急に繁昌して來ました。田や畑のものは、かり入れてもくどんくどんく實熟つて

くる、牛や豚は數へ切れない程子を生んで増はて来る、といふ調子で、一年の中にこの貧乏夫婦の家は、めきくと金持ちになつて参りました。で、今度の大晦日の晩、二人が又やつて來たら、思入りお禮をいはねばならぬと、二人は待ち構へて居りました。さて、近所の人等はこの二人の繁昌に付いては非常に驚いて居ましたが、其中でも殊更屹驚したのは、最初に二人の旅人を斷はつた金持の惣助でした。で、二人の繁昌は全くあの晩の乞食の旅人の賜物だといふことを夫婦の者から聞いた時は、「やれそんな事ならあの二人を泊めてやればよかつたのに、残念な事をした」といふので、一通りでなく後悔をしました。が、又今年の暮の大晦日にもやってくるのだといふことを聞いて、夫では今度きたら

是非私たちの家へ其二人をよこして下さいといふことを、いろいろと夫婦の者に願ひましたので、元來、心立のよい人等ですから、そんなに仰るなら、今度参つたら、卿等のお家へ行く様に申しませうと固く約束しました

さて其中に、月日がたつて、又年の暮になりますと、その大晦日の晩に案の通り昨年と同じ旅人が二人やつて参りまして、夫婦の家の戸口を叩きました。夫婦の者は、いさなりそこへ飛んで出て、昨年からこんなに繁昌になったのは、全くお二人のお蔭だといつて、いろいろとお禮を申し上げると、二人の旅人たちは、夫はお前方の正直のお蔭といふものだ、別に私たちに禮をいうことも要らない、そこで今夜も厄介だが一晚泊めてくれないか、と申され

ます。二人は、それはお安い事で、是非泊って頂きたいのですが、お向ふの惣助様が、昨年の暮、卿方をお断はりして、まことに濟まなかつたから、今年是非、よこしてくれ、去年のお詫をしたいからと申しますから、夫では屹度お二人に行つて頂く様にしますと固く約束しました、と申し上げますと、二人は

「あ、そうか夫では、今晚は惣助さん家へ泊めて貰ふことにしようかな」

といふので、二人は惣助の家へ出かけて行きました。

すると、惣助の家では、さあ福の神の御降來だといふので、家中上を下への大騒ぎ、惣助二人は、早速立關へ飛んで出て、去年の暮は家が大層取り込んで居て、飛んだ失禮をしたといふ様な事を

千偏も萬偏も謝罪って、さて、お二人をば一番上等の大廣間へ案内をする、勝手の方では、肥った牝牛を殺して、夫を料理する、其他に酒や肴や海山の御馳走を并べ立てゝ饗應をします、

さて、翌朝二人の旅人たちは早く起きて出立の用意をしますので、惣助夫婦は、今日は元日だから、せめてもう一日御滞在を、といひますと、

「いや、まだこれから先へ行かねばならぬから」といひます、夫では、今に馬車を支度させますからといふので立派な馬車を用意して見事な馬を二匹つけて、立關で待たせて居ます、二人の旅人は「これはどうもお世話様になりました」と丁寧に禮をいって、さて出かける時になって次の様に申します。

「折角お世話になりましたが相憎、お禮をするお金の用意もなく
 ってお氣の毒だ、……………時に、あの、牛には角があるかの」

慾助は、雞の足の話を夫婦から聞いて居ますから、今この間を聞
 いてそらおいでなすった、と思つて

「えーえ、ありますとも」

と答へると

「うーん、何本あるかな」

おかみさんは側に聞いて居て、此時そーつと慾助の袖を引っぱり
 ながら小聲で低聲きました。

「あなた、四本だと言ひなさいな」

慾助は「よし、承知だ」とこれもそーつと答へながら、

「へーは、確か四本で」

「あゝそーか、ではお前方に一人に二つづゝ、つまり四つの願を叶へさせて上げ様」

と言つて置いて馬車に乗りました。惣助は自分で馬を逐つて行つて此村の端れまで送つて置いて歸らうといふのであります。然し一生懸命に馬を逐つて居る中にも、其四の願を何にしようかといふことを絶えず、胸の中で考へ込んで居ります。所が、不意に馬が二匹とも顛げて、其爲に折角の馬具が臺なしに壞れました。惣助は、かと腹を立て、

「えゝ祿でなしのやくざ馬奴、いっその事死んで仕舞へばいゝに」と言つたが早いのか、二匹の馬は忽ち死んで仕舞ひました。さてこ

して慾助の四つの願の中の一個が叶ったことになって仕舞ひました。慾助は心の中でさてくつまらぬ願を言つて仕舞つたと思ひながら一人で馬車を引きづつて。やっさくとやつて行きます。

さて。慾助の女房は獨りで家に居て。今に慾助が歸つてくれば、

早く四つの願を相談して決めよーと思つて、待つてもく歸つてこ

ない、立ったり座つたりして居たが、とうく門口まで出て見たが、

影も形も見えない

「えー何をしてゐるんだらう、ほんとに愚圖じやないか、さつさと

歸つてくれはいゝに」

と言つて見た所が、忽ち慾助が其處へ歸つて來ました。夫を見て

おかみさんは

「おやくこれで折角の願を一つふいにしてしまった、夫はそうと、お前さん何故馬車などひきずって來たの、一體馬はどうしたんです」すると惣助は眞赤になつて怒り出して、

「どうしたって、こんなつまらない事したらありやしない、馬がけつまづいたから、こんな録でなしのやくぎ馬は死んでしまへばいゝといつて見た所が、どうだい、直ぐ願通りに死んで仕舞つたじゃないか、これで己の持つてる折角の願を一つふいにして仕舞つたんだ、一体、これといふも、貴様が餘計な口を出したためだ、己は始から、牛には二本の角がありますといはうとして居たんだのに、貴様が四本といへといつたんじゃないか、貴様の様な女には頭に牛の角が二本でも生へて來ると丁度いゝのだ」

腹の立った儘に、
 後前も考へない
 で言つて仕舞う
 と、忽ちおかみ
 さんの頭に、牛
 の角が、二本ニ
 ユーツと生へて
 來た。慾助は、
 「やっ、しまつ
 た」
 と言つたが、も



十六
 う遅い、慾助の
 願は、これで二
 つとも叶つて仕
 舞つた。残つて
 るのは、おかみ
 さんの願が、後
 に一つ切りだ、
 慾助は、やっとな
 氣を落ちつけな
 がら、
 「時に女房や、

もう後には、お前の願一つだから、どうかして夫を甘く叶へさせたいものだ、どうだ、お金を山ほども欲しいと願って見ないか」と言ふと、おかみさんは、怨めし相に頭の角に觸って見ながら「馬鹿々々しい、幾らお金があつたつて、死ぬ迄こんな頭に角なんか生へられて居て堪つたものですか、夫よりか、神様がきて一時も早くこの角を取ってくれる方がどれ位ありがたいかも知れないわ」

と言つたと思ふと、二本の角は何時の間にか消えて仕舞ひました。さて、これで四つの願が残らず叶つた事になりましたが、結局惣助は、其爲は一つも儲かる所がございませんでした、さしひき二匹の馬と一匹の牛を殺した丈けが損になつて。めでたしく